

特集

「表現」を たのしむ

小迫 妙子さん

絵でもなんでも、自分の心が
ときめくことを表現すれば、
それが「自分のアート」だと
思うんです。

 **自分が自分でいられる
唯一の時間**

さまざまな形や線、色で描かれて
いる絵たち。何を表現しているのか
パツと見では分からないという人も
多いだろう。

「その時に感じた自分の気持ちを頭
の中で想像して絵で表現していま
す。だけど見た人には自由に感じて
もらいたいですね」

そう話すのは、末吉町で画廊喫茶
エイティを営みながらローマン派の
絵を描いている小迫妙子さん。

「35年前に『絵のまち末吉』に絵を
普及した先生がお店のお客さんで。
『絵を描いてみたら?』と言われた
のがキッカケですね」

その当時はお店の合間をぬって、
睡眠時間も削りながら毎日絵を書き
続けたそう。

「絵を描くのが楽しくて。忙しい日々
の中、自分を表現できる大切な時間
になっていました」

そして47歳の時、上野の森美術館
作品展で6千点の作品の中から最高
賞を受賞しました。現在は、ローマ



① 色別に分けられた絵の具たち ② 息子さんが撮影しつくってくれた画集 ③ 上野の森美術館作品展で最高賞をとった時のポスター ④ アトリエにはたくさんの作品が ⑤ 息子さん夫婦と営んでいる画廊喫茶エイティにて

ン派美術協会の南九州支部長を務めていて、時には審査員という立場になることも。

「入賞しなかったからって落ち込む必要はないと思うの。『今回の審査員と私の好みが変わらなかったんだ』って。入賞したら『私の表現した気持ち審査員に伝わったんだ！』って思えば」

周りの意見に囚われずに自分の心がときめくものを信じて表現すればいい、と話してくれました。

制作を続けながら現在ではお店と都城で絵画教室をしています。

「教えるといっても、技術的なことや行き詰った時にアドバイスをするくらい。だって手を加えたら『私の絵』になっちゃう。人それぞれの表現があるから絵は面白いのよね」

絵をもっとたくさんの人に見てほしい

絵を描き始めて35年。ご主人の支えがあったからこそ、描き続けられていると言えます。

「絵を始めた時も道具一式を買ってくれて。15年前には私のために家の離れにアトリエを建ててくれたんです」

3年前に美術年鑑社から銀座で個展をだしてみないか、との提案が。しかし、ご主人が病気になることもあり断念しました。一昨年ご主人が亡くなり気落ちしていましたが、アトリエに行くとしに覚えのない1.6畳もある大きなキャンバスが。

「主人が病気できつい中、知らない間にキャンバスを張ってくれたみたいです。『絵を描き続けてね』と言われていたようです」

以前から、ご主人に「都会で色んな人に絵を見てもらえば？」と言われていたこともあり、昨年銀座のギャラリーに個展の申し込み。話はほとんど拍子に進み、今年の6月に開くことになりました。

「空から主人が背中を押してくれたみたいです。個展でも、これから多くの人に私の絵を見てもらいたいですね」と前を見据えていました。

アートと言っても服や彫刻や建築物などさまざま。まだ自分なりのアートが見つからない人は『ときめき』を手がかりに探してみたいか、がでしょうか。

特集
「表現」を
たのしむ



徳増 徳雄さん

「死ぬまでやり続けたい」
木彫り歴30年。それでも新しい
発見がやるたびにある。だから
楽しいと、続けたいと思う。

木彫りを通してできた
たくさんのお出会い

おうちに何うとたくさんさんの木彫りが。仏像や能面など神々しい雰囲気のものもあれば、イナバウアーをしているスケート選手や311をテーマにしているものもありました。その中には県の作品展で5年連続会長賞を受賞した数々も。

「その年に話題になったことを彫っていました。そうすると賞をいただけるすごく励みになりましたね」

そう話すのは徳増徳雄さん。なんと今年91歳になるそうですが、曾於市総合大学で木彫り教室の講師も行っています。総合大学の前身、メセナ大学の時代から25年間講師をしているというから驚きです。

「平成6年からだね。月に2回、教えさせていただけます。最初の頃は生徒さんたちも彫る時間が足りなくて、おうちをまわったりしたねえ。今では生徒だった人たちも教える側でやってきてますよ」

生徒さんたちの作品は県のシル

バー文化作品展などにも出品され、賞をとると自分のことのように嬉しいそう。

「今はコンテストの会場には生徒の作品を見に行くだけだけど、そこでも会うと話しかけてくれる人たちもいて嬉しいですよ。人との結びがね、人生においては大事になりますよ」

彫刻でつながった仲間がたくさんでき、輪ができていくのがとても嬉しい。ただ作品をつくるだけではない喜びが木彫りにあると教えてくれました。

初めての趣味 難しさが楽しみになる

数々の作品を彫り上げ、多くの生徒さんを持つ徳増さんですが木彫りを始めたのは60歳のとき。

「氏神様のお面がなくなって、地域のみんなが『残念だね』って話していたの。定年になったし、自分が作ろうと思ったのが最初。それから本を見ながらずっと独学でやってきてる。人生で最初の趣味だね（笑）」

昔からなにかを作ることが好き

だったそうですが、海軍の機関士として戦争も経験。九死に一生を得て帰ってきたあとも仕事一筋でした。

「仕事してたときもちょっとした大工仕事は好きだったけど。木彫りっていうのはまったくの初めて。でも難しくってどう進めていくか考えるのが楽しいでしょう」

総合大学の講師をしながら、自身では末吉町にある世貫神社の大きな雄牛を彫ったり、紫尾山にある神社の狛犬を彫ったりとさまざまな依頼にも応えてきました。

「昔は一日中、夜もやってたけど今は日が出ている時間だけ。今やっているのは生徒さんがやりたいって言うた能面なんだけど、少しずつしか進まなくて。自分でつくってみなきゃ教えられるから必死でつくっているのよ（笑）」

あまりに大変そうな作業に思わず、楽しいですかと聞いてみると「そら、楽しいよ」と即答。死ぬまで、元氣なうちはやり続けたいと力強く答えてくれました。これからまたどんな作品が生まれてくるのか楽しみです。

① 自宅にて ② 玄関先にある作品たち。色付けや筆入れも自身で行っている ③ 制作中の能面。図面はなくても彫れるという徳増さんだが今回は生徒さんに教えるためにきちんとつくる ④ 庭にある一番日のさす場所にて



特集
「表現」を
たのしむ



丸田 ちひろさん

「できるかわからなくても、それでもやりたいと思った」
悩んだから、考え続けたから、
今も続けられている



作っても作っても
楽しいと思えるもの

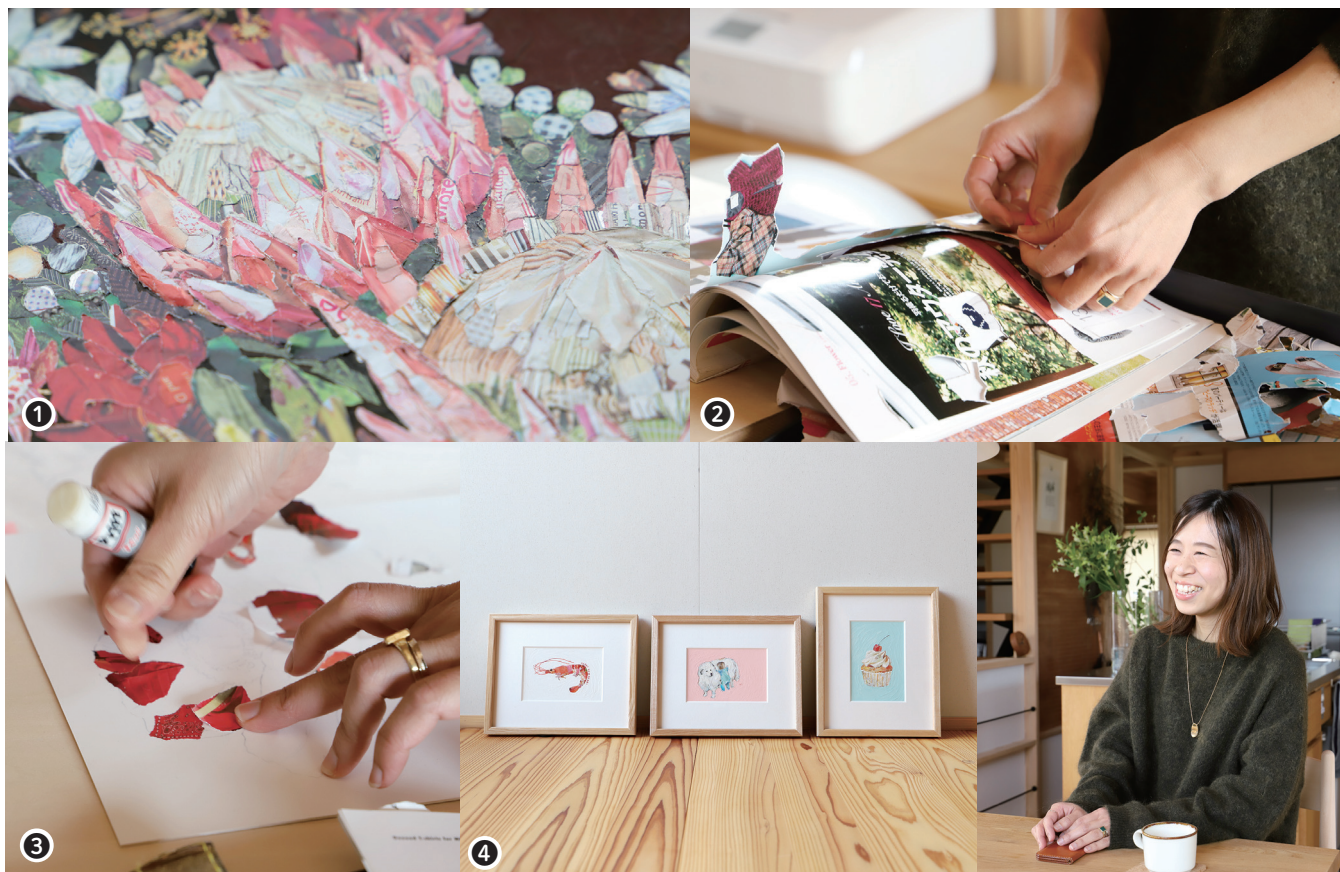
この作品みたら、まず『色がキレイにでてる素敵な絵だなあ』と思うはずです。その油絵のような厚みと奥行きに、どうやって描くんだろうと思つてよく見てみると文字が入っていたりなにかの印刷が見えてきて…そこでやっと『ちぎり絵だ！』つて気づく。そんな想像をしてしまうくらい見事な作品が並びます。

「見てる人に『あつこれよく見るとカバンだ！』とかそんな風に楽しんでもらえるのも面白いですよ。だからなるべく大きくちぎって模様がわかるようにしているんです」

そんな風にちぎり絵の楽しみ方を教えてくれたのは丸田ちひろさん。現在オーダーでの制作を主に活動しているちぎり絵作家さんです。なぜちぎり絵だったんでしょうか。

「昔から絵を描くことは好きだったんです。でも、色を付けると『なんか違う！』と思っちゃって」

高校では吹奏楽と掛け持ちで美術



① 近くで見るとちぎり絵というのがわかる ② 素材はよく読むという雑誌やお菓子のパッケージなど発色が良いものから ③ 貼っていく作業 ④ 今までの作品の一部。もっと見たい方は <https://majy0n00.wixsite.com/maruta>

部に入るも文学部に進学。そこでもサークルのイラストなどは描いていましたが、卒業後は住宅メーカーに、そしてアパレル業界に転職します。

「25歳くらいのときに今後自分がどうしていきたいかすごく考えて。服が好きでも販売員をずっと続ける未来が想像できなかったので、なにかしなきやと考えていたときにちぎり絵をやってみようと思って」

それまでに年賀状などで少し作ったことがあったものの、ちゃんと作ろうと思ったのはこのときが初めて。作ったものをお店で見せると周りからも好評だったそう。

「作っても作っても楽しくて。隙あればつくって持っていて、感想もらって：そうしているうちにお店に飾っているのを見たお客さんからオーダーをもらうことが出てきて『これからもちぎり絵やりたい！』って思っただんです。できるかわかんなくてもやりたいって思えたというか」

そのタイミングでアパレルをやめ、帰郷。仕事終わりの短い時間の中で、依頼を受けていくために試行錯誤しながら制作を続けました。



驚いてもらえるものをつくっていききたい

その後も書籍の出版や個展の開催などどんどん道を開いていく丸田さん。最初は年に10個ほどしか作れませんでした。今では月に2〜3個作れるほどに。そんなに作り続けられるのはなぜでしょうか。

「ちぎり絵には、これが正しいってことも正解もないので、やりたいことがどんどんでくるんですね。それに『自分は他のことよりもやっぱり絵がやりたい』と働いていたときに気づいたので腹をくくれたというか（笑）」

現在は6月に都城で行う予定の個展に向けて鋭意制作中。オーダーとは違う感覚で作っているのだそう。

「オーダーのときは喜んでもらえるものをつって考えてるんですが、個展に出すのは『驚いてもらえるもの』『欲しいと思うもらえるもの』を目指しています。難しいですけど…」

個展や作品の詳細は丸田さんのホームページなどでも確認できます。今後のさらなる活躍に期待です。

特集

「表現」を たのしむ



曾於高校美術部

「同じ空間で絵を描いてると
『やらないきゃ』って思えて頑張れる」
作品と向き合う時間は一人じゃない

自分との戦い だけど仲間がいる

美術室に入ると大きなキャンバスを前に筆を動かす生徒たちの姿が。曾於高校の美術部は今年卒業する3年生を含めて現在12名が活動しています。取材をしたのは1月中旬。8名の生徒が吉井淳二記念展に向けて作品を制作していました。

「描いていて、つまることもあるんですけどこうしてみんな同じ空間で絵を描いてると『よし！自分も頑張ろう。やらないきゃ』って思えるんです」そう話してくれたのは部長の池田舞音さん。中学には美術部がなかったそうで、高校に入ってから初めて部活動を経験しました。

「文化祭や体育祭のときには4〜5層ある看板をみんなで描いたりするのにもとても楽しいです。作品を描くときは、みんな描きたいものを描いていて大会ではライバルだけど仲間がいるのはすごく嬉しいです」

入部したとき自分の学年は池田さん一人だけでしたが、先輩たちから受けたアドバイスなどは自分として



いきたいと、後輩たちと一緒に日々制作をしているのだそう。

**好きなものを、だけど
きちんと考えて描く**

「先生からの指導で気づいたこともたくさんありました。芸術短期大学に合格できたので嬉しいです」

そう話すのは3年生の東晴菜さん。この春から芸術短大に進学します。

「大学ではデザインを勉強することになるけど絵を描くことは続けていきたいです」

と同じ学校に進学する3年生の黒崎美羽さんも一緒に笑顔で話してくれました。2人は吉井淳二記念展での3年連続入賞を目指しています。

部屋の中を見渡すと絵のテーマも描き方もさまざま。みんな真剣に向き合っています。

「好きなものを描いていい。だけどメリハリをもってちゃんと考えてから描くように話しているんです」と顧問の川畑先生が教えてくれました。

どんな絵が並ぶのか2月22日からの吉井淳二記念展にもぜひ足を運んでみては。